にやるからに。あとへ歸ろと思やんな思やんな。あとの田地は誰にやる誰にやる。向の丈夏は田地持ち田地持ちてくれやつてくれ。向の丈夏にやつ田地廣めてくら建てゝくら建てゝ。くらのまわりへ松植へて松植へて。松の小枝へすゞさげて鈴さげて。鈴がじやんじやん鳴る時にやなるときにやじいさんばーさん嬉しかろ嬉しかろ。

手毬歌

三河國西加茂郡筥生村字黑笹通信員

近藤ときゑ

一に俵をふまへて　二にニッコリ笑つて
三に盃手に受けて　四つ世の中よい樣に
五ついつもの如くに　六つ無量息災に
七つ何事ない樣に　八つ邸をひいろめて
九つこゝらに家立てゝ　十でとんと治まつた

四月の天地

川口孫治郎

園藝。上旬より亞麻、長瓢、圓瓢、王蜀黍、落花生、馬鈴薯、西洋葱、除蟲菊、下旬より西瓜、甜瓜、唐胡麻、里芋、やつがしら、などの種下し楓、木犀、無花果、佛手柑などの植替に適す。其折々。更衣、昔は月の朔より袷に更め、足袋を穿かざるを例とせしが、今は太陽暦に依り舊式を踏まず。

三日、恭しく、皇祖の遺烈を追慕し奉る。

灌佛會、陰曆八日は釋迦の誕生の日に當り、卯の花を供げ甘茶を煎て、其誕生の像に灌ぐ、今はこの月に行ふものあり。

十五日、來む十月十五日まで銃獵を止められる。いとうれしき春に世は泰平となべての禽獸は、山に野に、林に森に叢に、枯枝枯草さては苔、棕梠、毛髮、羽毛等を以て、枝の蔭、幹の空虛、岩の礀土の中など思ひ〳〵に、或は横に或は斜に或は上向に巢を營む。

十日、陰曆三月三日に當り、年に二回の大退潮の其一日なり。

行け、汐干狩に籠さげて。驚く勿れ鰈は我足跛に跳ぬるとも、貝の古巢に宿借り蟹の轉ふが如く逃ぐるとも。此嚴めしき岩蔭を探り見よ、其美しき砂の間に心せよ、彼麗はしき海藻の中を分ち見よ、蜊蛤、いぼ貝法螺貝烏帽子貝、鮑に螺螺海扇、蝦皿貝あり、子安貝あり、牡蠣あり車渠あり稀には眞珠あり、わらわの友垣……海酸漿あり、僕の親友……海蛾君あり、況して、此等の貝と彼海布昆布石蓴鹿尾菜石花菜など籠にして、碧濤の碎けて白泡の激する此巨巖の項に起つて、萬里、一碧の春の海を望むに於てをや。

來れ、若草の綠を踏みて春の野に。惠風肌に暖にして方に之れ散策の好季節なり、畫板を手にするもよく、採集罐を腋にするも寫眞機を肩にするも亦可、殊に一家相携ふる最もよし。

朝日に匂ふ山櫻、彼岸櫻に椎櫻、枝垂櫻や緋櫻黃櫻兒櫻、おのがむき〳〵全盛の頃。滿山櫻花の吉野山、紅綠相交りし嵐山、萬綠叢中紅一點の名もなき深山の奥の奥…峯の櫻、麓の櫻、岸の櫻、

雨中の櫻、雨後のそれ、狂風の前のそれ、微風に任かせるそれ、人丸赤人、降りて貫之定家俊成などは暫く言はず、勿來關に駒止めて散る花にそぞろすさみし八幡太郎義家の懷志賀の都の咲く花に昔をしのぶ涙濺ぎし薩摩守忠度の感、胸に溢るる熱誠を唯兩行に單めておろがむ備後三郎高德の衷、幾代經ぬとも變らぬものは水の流れと人心、頼もしの世の中や。

麥浪萬頃　翠色滴らむとし
鮮黃なる、油菜、からし菜の畑、
紫濃き紫雲英の田圃之に綾をなして翠色更に麗はし。

家あり、垣根に婉麗なる桃、清楚なる梨、淡泊なる李杏など開きて、孜々として蜜蜂鬱み、路あり、可憐の菫菜、可愛の蒲公英、いとしの烏豆などに、翩々として胡蝶舞ひ、

畔あり、蠶豆語り、豌豆笑ひて、團子の如き黑蜂汝々として唸る。

横より望みて、遙に聳えて黑煙を曳けるは、野中の工場の煙突なるべく、近く麥の葉末に白帆の突出でゝ寛くゆるぐは川舟の下るならむ。

高く登臨すれば、此麥綠菜黃の地に紫紅黑白相交りたる大平原は總て一望の中に在り、佐保姫の

織りなせる錦といふは即ち之なり。

誠に四季に春あり地に花あるは、なほ、天に星あり、人に女性あり、物に文學あるが如きものか非耶。

此稿本月を以て一ト先一ヶ年を結了す、他日暇あらば更に續稿を起さむ。

筆者　識

櫻花ささにけらしな足曳の
山のかひより見ゆるしらくも

結婚論（承前）

野本生譯

此他、結婚に就いて、青年者の多く心を惱ますところのものは、世俗の所謂、其の女子の社會上の地位如何である。然れど、稱して、社會上の地位といふもの、其の實、是れが解釋を爲すことは頗る困難なのである。世の家族たるもの多くは、其の預想せる結婚の爲めに、只管、其の社會上の地位を高めんとするに汲々として居る。併し、其は、時代い然らしむる所の最も不幸なる惡習であると思ふ。亞米利加には貴族、平民といふやうな區別は、決して、出來ない。殊に現今は猶更さうである。然れは、吾人の所說は、目して極端とするの要なく、又米國社會に階級制度の存在を拒むの必要もないのである。何となれば、我國の社會てふ界線は、我等各箇人の充分なる保護の爲めに引かれて居るからである。是れ、如何なる大國にとりても、斯くあるべきが正當にして、又正當でなくてはならぬ。此國社會上の元氣、希望、及び國民の生命は、所謂、中等社會てふ一大階級の中に存して居る。此の共和國の骨子となり、纖維と

なるところの心意、物質、並に道德上の要素は、悉く、此の階級より來るので、現今、米國の家庭を飾るところの最良なる標本的女流も亦實に此の中より來るのである。然れば、此の階級に對して誹謗を敢てするものあらば、其は已れ自ら、其の賢明なる人々の間に伍するの價値なき事を證明するに外ならないのである。今日、米國の女子にして、眞實にして、最良に、兼て又、極めて愛すべき模範的婦人は、華美、嬌奢なる富家の家庭にあらずして、却て、質素、和樂なる、所謂中等社會てふ一大階級より來るのである。米國婦人としての、其の最良なるものを我等男子に與へ、曾ては我等祖先の人々にとりて大なる助となりたるものは實に此の中等社會である。其の女子に戀愛の眞意を訓へ、客室にての立ち振舞を敎ふる所のものも亦、此の社會である。其の子女に對して、妻となりての責任を敎へ、母となりての心得を訓ふるは勿論、更に庖厨の實際的生活を敎ふるものも、亦、同じく此の社會である。此等の女子は、或は馬車を驅ること能はざるべく、高價の衣服を纏ふこと、又能はざるべく、猶又、其の家族の收入に多少の貢献をも爲し能はざるべし。然れど、現時は勿論、未來に於ても、米國社會の城壁となるべきものは此等の女子を措きて、他にないのである彼等は米國の家庭を代表し、又其の樂しき家庭生活に於ける最も誠實に、最も善良なるところのものを代表して居る。又彼等は我等米國男子の爲めに最良なる妻女を供給するのである。予は米國婦人が現今其の占むる所、其の粧ふ所、並に其の正當に有せるところの其地位に代ふるに或る他の者

を以てせんとする多くの論者に同意することは出來ぬ。何となれば、彼等が現に占むる所の地位は吾人の、信じ、貴び、且、喜ぶところのものであるからである。彼等は只に現社會の女流に非ちずして、更に是よりも優等なるものである。彼等は世俗の外觀的、皮相虛榮の生活には毫も經驗をもたない。其の知る所は唯、夫婦相和し、親子相愛し、心を合せ、行動を一にせる、和合一致の家庭生活の眞味である。世に父の如く、然く善良なる男子はなく、又、其の母に比すべき、然く愛すべき女子なしとは彼等の信ずる所にして、又世に善良なる男子多く、又同じ女子も多かるべしとは、又等しく彼等の信ずるところで、其の所信たるや元より正當なのである。此の種の女子を娶りて、其の妻となすものは、其の生涯を通じて、永く、最幸多福を享くることが出來る。

（未完）

櫻花ちりぬる風の名殘には
水なき空に波ぞたちける

灌佛會

せく生

我が國にては四月といふ月は二月と全じく、宗教的事項まことに少し。只二四月のみならず、偶數の六八十等の月に少くして、奇數の月即一三五七九などいふ月に多きは、豈に面白き現象ならずや。其の如此理由は今明に之を知る由なけれども宇宙の現象は、凡て律動といふ原則に支配せらるるが故に、年中の人事現象とても、彼の四季あり晝夜あることの嘗て誤られし例なく、睡眠の次に醒覺來り、疲れては又眠るといふ如く、月々交

互に賑ふ月と寂しき月あるは、亦自然の妙用とも名つくべからむ。今本月中の面白きものをいはゞ釋迦の誕生日四月八日の灌佛會なるべし。

灌佛は浴佛とも佛生會ともいひ、此の日諸寺院に至れば、諸品の花を以て小堂を飾り、之を花御堂といひて其の内に小き釋迦の像を安置し、甘草等の香水（甘茶、甘水、五香水）を灌ぐを見るべし。其の起原及び釋迦牟尼の話は他日にゆづりて、我が國に於ける浴佛の由來を語らんに、諸君の御承知の如く、今を距んぬる千三百五十年許昔の欽明天皇の御代、佛教國の百濟より佛經佛像は公然と我が朝に遷されたり。それより漸次民間にも傳播せられ、推古天皇の時聖德太子等の鋭意布教を勉められし結果、漸く細々しき儀式をも輸入して、灌佛も此の時より行はれたるか如し（公事根源年中行事歌合などに）されども是れ民間等の私式にして、公に朝廷にも行はれしは實に彼の仁明天皇の承和七年四月（今より千六十二年前）律師傳燈大法師靜安を清涼殿に請じて始めて灌佛の事を行ふ（類聚國史）とあるを始とす。

此の儀式の樣は公事根源江次第等に明にして又誰人も所在々々の寺院に其の實際を見るなれば今茲に記する要を見ず。されば進んで其の如何なる意味なるかを考へんに、是亦「四月八日は今是れ佛の生日にて人民佛の功德を念じ、佛の形像を浴す」（摩訶利頭經）とあるにて明了なれども、深く其の眞意を究むれば本來は彼の悉達太子が摩訶摩耶の胎内より生れ出でし儘の身體を清め奉りて各自に佛陀に對する功德とせるなるべし。

佛陀の寂滅後其の教は益々弘まりて中印度の英主阿育王の宣教僧派遣となりては、西方遠く地中

海の邊に及び、猶太人にも頗る此の教を奉じたるものを生じ（耶蘇教も其の教義儀式等に佛教より出でしものらしきあり。）て、耶蘇以前より洗禮を行へる有名の「ヨハネ」等あり。耶蘇は實に彼を師とし彼に洗禮を受けたりとさく。洗禮は實に我が汚穢を去り我が罪障を淨めて、新に生れ替はる意味にて異教徒若しくは無宗教者の新に耶蘇教徒たるべき時は必ず受けねばならぬ儀式なり。

されば一は教祖を灌ひて自ら功德とし、一は教祖（神の子）に洗はれて自ら其の功德を蒙るにて佛教と耶蘇教とは相似たる儀式を異なれる意味に行ふものといふを得べし。

寡婦と愛子

（アーヴィング）

一　二　三　譯

私が田舍に住んで居りました時に、折り〳〵村のある古寺に參詣しました、その蔭暗い本堂や、朽れて崩れかゝりそうな石碑や、又は黑ばんだ樫作りの嵌板細工をした天井などが、年を數多經過しました處から、非常に打ち古びまして、何となく神々しく見えました。で私はこんな場所に居ますると、神聖な思慮を起す事も出來るだらうと考へました、此村では日曜日を安息日として、神に祈禱をあげる日として居りますが、誠に此日は平和の色が人の心の上に擴がりまして、人の心も和らぎ心の奥に潛んでる宗教心が起るやうに思はれました。

一体私は神信心をすると言ふ側の人ではなかつた、只何となしにこんな天地の靜かな日に寺へ行くと、神を信ぜずとも、常なりは善人になつた

やうな氣がするのであります。

しかし、此寺の近邊には、財產の多い人や、貴族などが住んで來た處から、薄情だの、華美などゝ言ふ風が、此神聖な境に迄入り來んだを見ると今迄天界に上つたやうな感情を起したのが、こんな俗物の爲に、俗界に投げ出されたやうな心地がしました。

只群衆の中に、病身で齡の傾いた一人の老婆がありまして、此老婆は誠の耶蘇教信者のやうに見えましたが、よく其有樣を見ますと、何處やらに本からの貧乏人ではないやうな所が見受けられまして、昔の名殘か忍ばれるやうに、何處やら品格もありまして、着て居る着物は粗末なものでしたけれと、嗜よく奇麗にして居りました、尙老婆が貧民の席に坐りませんで、獨り離れて神壇の階に

座つて居つたのを見ますと、多少村の人から尊敬されて居ると言ふ事が、知られました。

此老婆は、兄弟や、朋友や、又時世にも後れまして、只獨り此世に殘されて、天國へ行くより外に望のない者だと思ふと、私は氣の毒に思ひました、そして、私は老婆か力なく起き上りまして、其老體を動かして、祈をするのを見ます時に、何時も其手には祈禱書を持つて居りますが、其痿れた手、霞んた眼では、文字を讀む事は出來ませんが、是はちうに覺えて唱へて居たのです、この哀れな老婆の慄聲は、牧師の聲よりも、「ヨルガン」の響よりも、讃美歌の節よりも前に、天國に届くやうに說き勸めるかと思ひました。

私は田舍の寺院などを徘徊ずるのが好でありました殊に此寺は景色も中々好い所でしたから、私

は度々此處に遊びに來ました、此寺は小山の上にありまして、其周圍を小川の流が一めぐりして遠く美しい牧場の間を流れて行きます、そして寺は水松がこんもりと繁つて、其木は皆此寺と同じ年を經たやうに思はれました、その間から、「ゴシック」式の尖塔が突き出て、その邊には何時でも烏が群をして飛んで居りました。

ある朝、天氣が好かつたので、此處に遊びに來て、休んで居ましたが、其時二人の人夫が墓を堀つてるのを見ました、其人夫等は墓場のでく遠いでく粗末な片隅の處を撰びまして、墓を堀つて居たのでした、其近邊には無緣の墓ばかりで、貧亡人や友のない者なとが、雜つて葬られ居るのてありましたが、今此人夫が堀つて居た新墓は、あはれな寡婦の獨り息子の爲に作らたのてした、私はこれを見まして、人の身分の高下と言ふものが、其死悔に迄も及ぼすかと、獨り考へて居りました時、葬式の行列の近付て來るのを、知らせる寺の鐘が響きました、貧亡人の葬式でしたから、何もこれと言ふ飾りもなく、到て粗末なものでした、棺桶も到て粗末なもので、棺にかける一枚の衣さへありませんで、露出のまゝ、二三人の村人に擔はれて、一人の寺男が冷淡な顏付をして其前を歩行いて行きます。全体此葬式には、かゝり物とする泣男などゝ言ふものも雇はす、何となく淋しかつた、けれとも、亡骸の後へ力なく付いて行つた一人の心厚い會葬者か居ましたが、それは死んた者の、年老いた母てあつた、私かまへに寺の神壇の階に座つて居つたのを見た、かの老婆てありました、老婆は一人の婦人に手を採られて居ました

其婦人は荐りと老婆を娯めやうとして居ります、又近隣の二三の貧人も、此葬式の行列の中に加はり、村の小兒は、亦手に手をとりかはして附いて行きました、罪のない小兒達は、何の考へもなく走つて見たり、又立止つて見たり、又笑つたり叫んだりして、皆不思儀そうに、此老母の泣顔を見て居ました。

此葬式の行列が墓場に近ついた時に、寺の牧師か玄關から出て來ました、身に白袈裟を着けて、手に祈禱書を持ち、一人の弟子を後に從へて居りました、けれど、此葬式は單に慈善的の者でした固より死者も金を殘しませんし、老母も財といふ者はなかつたから、葬式はまるで形式的に濟まされてたゞもう冷淡に、例の肥へた牧師は、寺の戸際より二三歩動いた計りで、その祈りの聲は、やゝゝつと墓場に屆いたか、屆かぬ位でした、全体葬式と言ふ者は、何處迄も重々しく、且感動する禮儀てあるへき儀式であるが、かゝる勢力のない滑稽じみたと言ふへき葬式と言ふものは、今迄耳にした事はなかつたのです。

私は墓場へ近づいた、棺は、今地上に落されて其上に「ジョージソーマトス」行年二十六才と記されてある、哀れな此老母は人に扶けられて、死者の棺に跪いて祈禱をしよふと漸く其兩手は合せられたけれど、聲は丸で出ませんで、只其身体かいゝいゝゆすぶられてるのと其唇のいゝいゝゆかんでる樣子とに依て、吾最愛の子の、此世の名殘（今埋め終ると再び見る事の出來ぬ、吾子の死骸を入れたる棺）を、堪へ兼ねた戀慕心を以て、見詰め居るのが分りました。

愈々棺をは、地面の中に埋める仕度に取かゝつた。

若葉集

松の舍

◉口で言つては詰らぬ話、書いては尙更纏まらない事に、若葉集とは、如何にも萃な名前が氣に入らぬと思し召すかは、知らないが、さりとては折節の陽氣に浮かされての無駄書、若葉を倒に御覽遊ばさば、自然と御合點の事なるべし。

◉昨年頃歸朝されたる年若い醫學士のいふ。ブレスラウで私の下宿屋の娘（尤も年は五十許りでした）中々の國自慢でいつも〳〵私に「どーですドクトル、獨逸は進んで居ませう、お國と比べてどーです」といふもんですから、私も負けぬ氣になつて「左樣さ中々開けて居ます、けれども日本の國では婦人は大抵三十迄に片付きます、年齡五十の令孃などは、見たくつてもありませんね」と言つてやりました。

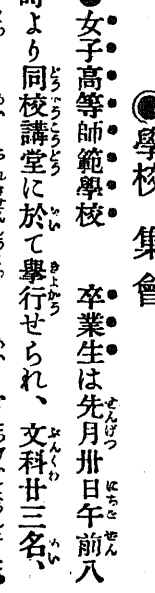
◉日本では、婦人に年を聞など餘り心に懸ない樣であるが、西洋では余程注意して居る、已を得ないで聞くをにしても、婦人に向つては自分の思つたよりもズット少く聞樣にする事が必要であるとは誰かの話、さりとて三十の婦人に向つて「十八位でせう」などは、反て輕蔑した事となるべし。

◉妙と云ふ字は、女邊に少といふ字を書く、一体佛の方でいふ妙といふ意味は、中々深奥でとても口以て云ふべからず、筆以て記すべからざる所、所謂、玄之又玄といふ有樣をさして云ふのださうで、そこで何故女邊に少と書くかといふと、「少き女の亂れ髮、いゝにとかれず、ゆゝにゆはれず」

といふ處から來て居るとの事、

◉そんなら妖怪の妖といふ字は　如何です、矢張り女邊に夭、妖怪の妖にも矢張り、深奥幽妙の意味が、合まれて居ませうかなといふ、處が此方は少し違ふ、女といふものは、大に作りに依つて相格が變る、殊に年少き婦人に於て然り、年少婦人が其作りに依つて、大に其相格を變化すること、恰かも妖怪の如き所から、妖怪の妖の字が出來たなど得意氣に語る人のありしが、果して如何にや

◉婦女と小兒とは、共に紅い飾を好むこと、毎日衣物や帶のことをいふこと、嫉妬の心强きこと、自我の念に富むこと、よくキャッ〳〵と笑ふ事、而して、優し過ぎれば馴れ過ぎ、强過ぎれば泣き出す事、等あらゆる點に於て、相似たりといふ人ありて、吾は思はず打腹立てたり。



◉學校、集會

●女子高等師範學校　卒業生は先月卅日午前八時より同校講堂に於て擧行せられ、文科廿三名、理科十七名、地歷專修科卅四名に各卒業證書を授與せられたりといふ、尙詳細は次號に報ずべし▲

●送別會、同日午後三時より在留學生諸氏發起となりて、卒業生の爲めに開きし由なるが例によりて頗る盛會餘興の薩摩琵琶など殊に面白かりし由▲

建築中なりし講堂も悉皆出來上りて、從前の約二倍大となりぬ前庭の教室も悉皆工事終りたりとの